Asaファーム

淺川　博範さん

久留米市／就農3年目

土づくりに注力して ワイン用ぶどうを育てています

BLOF理論で生産したぶどうを使った 他にはないワイナリーを開業したい

本職は不動産鑑定業の淺川さん。実家（大川市）で稲作をしている両親が病で続けられなくなったことから、淺川さんが引き継ぐことに。淺川さんは、米づくりをどうすればビジネスにできるかを検討。当初は酒米の生産を検討したものの、日本酒は米より、水の風味が酒質に与える影響の方が大きいとの考えに至り、ワインについて勉強を開始。そこで「テロワール」（ぶどうは、その土地の土壌や気候等がワインの品質に影響）を知った淺川さんは、実家の水田は他の方に貸し、ワイン用のぶどうづくりを始めることを決断。

淺川さんは、酒米づくりを検討していた頃に差別化の手段として有機栽培に着目。それがきっかけでAGSAを知り、６期生として学んだ後、2021年に久留米市で就農。

農地は、淺川さんが不動産鑑定の仕事を通じて知り合ったJA関係者に相談したことで、小屋付きの農地をスムーズに確保できました。

Asa ファーム

栽培品目：ワイン用ぶどう
経営面積：約65a
代表の淺川さんは、不動産鑑定業を続けながら農業に従事

Facebook
https://www.facebook.com/Asakawa.Sustainable.Agriculture

有機栽培の実践

以前はキウイフルーツが栽培されていた遊休農地を整備してぶどうの苗木を定植。毎年少しずつ、イノシシ対策用の柵を広げながら定植し、現在、様々な品種を約350本定植。一番古い木でも今年で３年目であり、本格的な果実の収穫はこれからです。

苗木の定植前には、かなり深い深度までトラクターでよく深耕し、その後、BLOF理論に基づき、堆肥（有機質資材）の施用と有機肥料によるアミノ酸の補給、土壌分析・施肥設計に基づくミネラルの補給を実践。定植後は耕うんは行わずに、毎年度行う土壌診断の結果に基づき、樹のまわりに堆肥（有機質資材）、ミネラルを散布。毎年、追加の苗木を、太陽熱養生処理後に植栽できるようになりました。

また、病害虫防除のため、微生物（納豆菌）を自ら培養し、園内に散布・充満させているほか、必要な場合には有機JASで許可されている資材（ボルドー液や石灰硫黄合剤）を利用しています。

定植後３年目を迎えるぶどうの樹々

経営面の取組・工夫

淺川さんは就農後も、不動産鑑定業の仕事を継続し、農業と両立しています。淺川さんの感触では、農業と不動産鑑定業に従事する時間は１：１とのことですが、実際は、雨の日以外は基本的に毎日農場に通っています。不動産鑑定の仕事は、その性質上、リモートでも可能なため、淺川さんはぶどう園で農作業をしながら顧客対応もこなしています。

農園での作業は、基本的に淺川さん一人で対応。徐々に作業仲間も増え、ワイン好きの方々、志に共感する方々に手伝ってもらっています。

営農に必要な機械・設備は自費で購入。費用を抑えるため、イノシシ対策用の柵は、ホームセンターで安価な商品を購入しています。

また、Asaファームを多くの人に知ってもらうため、SNSを通じた情報発信にも積極的に取り組んでいます。

SNSで日々の作業内容を定期的に発信
（写真はAsaファーム提供）

今後の展開

淺川さんは、今後ともBLOF理論を基本にぶどうの栽培を行う方針です。また、これまで土づくりが中心であったところ、本年から本格化する果実の収穫に向け、4月からはリモートで受講可能な長野県のワインアカデミーでぶどう栽培、醸造技術、ワイナリー経営を学びます。

また、ワイン用ぶどうは熟度に合わせて一斉に収穫する必要があるため、状況によってはイベントとして人を集めることも淺川さんは考えています。

さらに、ワイナリーの開業を構想している淺川さんは、その実現のために、国の構造改革特区制度（いわゆる「ワイン特区」）を活用するとともに、ワインツーリズムも視野に入れ、眺望に優れた地を探し、その場所で新たにぶどうの栽培を始めることも検討しています。

淺川さんのぶどう生産が軌道に乗り、ワイナリー開業の構想が実現することで、有機農業の拡大とともに、地域の活性化も進むことが期待されます。

もっと聞いてみました！

Q. ワイン用ぶどうの土づくりは？

A. ワイン用のぶどうは、石灰質土壌や海沿いの塩分を含む土壌等、その土壌の性質によって、ワインへの官能が異なります。

現在、土づくりには、こだわりのバーク堆肥のほか、地元の醤油製造会社から入手した醤油粕を使っていて、醤油粕に含まれる塩分によるぶどうへの影響を試しているところです。

Q. ワイン用のぶどうの品種は？

A. 現在、ピノ・ノワール、カベルネ・フラン、ビジュノワール、カベルネ・ソーヴィニヨン、ソービニョン・ブラン、アルバリーニョ、甲州等を垣根仕立てで栽培しています。苗木は長野県の業者から調達しています。

ぶどう園の管理に用いる除草機

Q. この3年間を振り返ると？

A. ワイン用ぶどうの栽培は九州では限られており、JAや普及指導センターから指導を受けることは無く、栽培技術に関する勉強は、書籍やワイナリー見学、動画投稿サイト等を使った独学です。

この３年間で多くの失敗を経験しましたが、失敗を通じて体感したこともあります。例えば、２年目は農地拡張のための整備や獣害対策用の柵の設置に労力を要し、礼肥（果実の収穫後に与える肥料）を怠ったところ、本当に生育が不良でした。また、土づくりをしないで粘土質の土壌に直接定植した苗は活着がよくないことも体感しました。

Q. この先心配なことは？

A. 今年から本格的な収穫を迎えますが、「べと病」（罹患すると甚大な被害）対策として、３～４月に化学的防除が必要かどうかを見極める必要があると考えています。

温暖化の影響も心配です。日射量が増えると糖度は高くなる一方で酸味が落ちると聞いています。九州は温暖な地域であり、大雨のリスクもあるので、工夫が必要だと考えています。